

一人一人が未来の創り手となる豊かな学びの創造

— 学校教育目標の実現につながる資質・能力を育む カリキュラム・マネジメント —

指導主事 林田 祐二

研究協力校 玉名市立玉水小学校

1 カリキュラム・マネジメントについて

「カリキュラム・マネジメント」とは、「児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと」¹⁾である。この「カリキュラム・マネジメント」は、3つの側面、「教科等横断的な教育課程の組織的な配列」（側面Ⅰ）、「PDCAサイクルの確立」（側面Ⅱ）、「教育活動における内外資源の活用」（側面Ⅲ）からとらえることができる²⁾。

また、中央教育審議会「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」には、「管理職のみならず全ての教職員が「カリキュラム・マネジメント」の必要性を理解し、日々の授業等についても、教育課程全体の中での位置付けを意識しながら取り組む必要がある」³⁾とある。そのための中心となるのは、各学校で位置付けられている「学校教育目標」である。

そこで、昨年度は、研究協力校の玉名市立玉水小学校において、学校教育目標の意識化を中心に「カリキュラム・マネジメント」の環境づくりに取り組んだ。その中で、学校教育目標の実現につながる「育てたい3つの力」（共感力・考動力・やりぬく力）を設定し、キーワード化やワークショップ等の取組を通じて、個々の教職員が学校教育目標について更に認識を深め、自分の校務分掌や授業とのつながりをより意識し教育活動を実施、評価できるようになってきた。

本年度は「育てたい3つの力」を手掛かりに学校教育目標の実現状況を評価し、改善ができるPDCAサイクルの確立に重点を置くこととした。これらのことで、効果的・効率的に学校組織をマネジメントできるのではないかと考えた。

2 カリキュラム・マネジメントの実際

学校教育目標の共有化を図り、教科等横断的な年間指導計画案を策定するなど、教育活動の構想を立て、構想に基づき学校教育目標の実現に向けた教育活動を実施し、評価、改善につなげるようにした。特に、児童に教科等で身に付けさせたい資質・能力を育むとともに、教科等横断的に「育てたい3つの力」を育むために、授業改善に力を入れて取り組んだ。その他、いくつかの特徴的な実践を後述する。

(1) 教育活動の構想（P）

学校教育目標を実現するには、何より全職員で具体的な児童の姿や取組を共有することが必要である。

「育てたい3つの力」に沿って、各校務分掌で具体的な実践事項を明らかにするとともに、どのように学校教育目標の実現を評価できるかを明確にした。

① 学校教育目標の共有

【学校経営案の改善】

昨年度は、学校経営案の重点努力事項を、「知徳体」の柱でまとめて示した。しかし、「育てたい3つの力」とのつながりが不明確な部分もあった。そこで、本年度は、「育てたい3つの力」で編成し直して示した。そうすることで、計画、実践、評価が「育てたい3つの力」に沿ったものとなってきた。

また、現在、次年度へ向けて、「育てたい3つの力」を資質・能力の3つの柱に沿って整理し直し、PDCAサイクルの視点を示したグランドデザインを策定し、地域に発信する準備をしているところである。

重点努力事項		
共感力	考動力	やりぬく力
① 自他の良さ等へ気づく工夫(徳) ・対話、学び合い、振り返り等 ・道徳実践力の向上 ・人権感覚の育成 ② 人権集会・交流活動等の工夫(徳) ・共感的他者理解の推進 ・コミュニケーション力の育成 ③ いじめの未然防止(徳) ・居場所づくり学級集団づくり ・家庭との連携による丁寧な対応	① 主体的・対話的で深い学び(知) ・思考力、判断力、表現力育成 ・児童の対話やアウトプット重視 ② 行事や委員会活動の工夫(知) ・プロジェクト的活動 ・目標の共有、意識化と振り返り ③ 自己指導能力育成 生徒指導Ⅲ ・自己存在、自己決定等 ・規範意識の醸成 ◎安全・健康な生活態度の育成(体) ・登下校、学校生活 ・食育	① 基本的知識・技能の習得(知) ・漢字、計算、家庭学習等 ・習得方法や計画立案の工夫 ② 持久力・忍耐力(体) ・計画、協力の手立て ・目標設定、見通しの持たせ方 ③ 基本的な生活習慣の育成(体) ・生活リズム ・運動習慣作り (外遊び、一輪車、縄跳び等)

※教科間連携と地域リソースの活用を推進し、効果的に育てたい力の育成を目指す。

図1 学校経営案 重点努力事項（抜粋）

【ワークショップでの共有化】

学校経営案で示した「育てたい3つの力」の具体化に向けた実践事項について、昨年度末に取組事項を見直したものを、年度当初に全職員で確認し、共有化を図った。

平成30年度 学校教育目標の具体化に向けた実践事項		
学習面	共感力	
	キーワード	具体的実践内容
	学習形態	○ペア学習やグループ学習の設定 ・友達の考えの良さに目を向けさせるグループ学習の設定 ・ペア学習、グループ学習等の設定 ・友達同士での教え合いの場の設定 ・グループでのプレゼンテーション活動の設定 ・学んだことを発信し合う場の設定
	学習支援	○児童同士の教え合い ・授業で悩んでいる子に対しての児童同士のアドバイス促進 ・学習課題が終わった児童による教え合い活動促進
	交流活動	○友だちの良さを認め合う場の設定 ・友達の考えを説明する活動の設定 ・授業の繰り上げ場面での反応（返し）の仕方を提示 ・互いの作品の良さを発表し認め合う場の設定
	振り返り	○振り返りの場での視点の提示 「内容」「方法」「姿勢」

図2 学校教育目標の具体化に向けた実践事項一覧

（共感力・学習面部分の抜粋）

【マネジメントシートの活用】

学校教育目標を一人一人に浸透させ、各自の業務とつなげるために、マネジメントシートを活用した。教職員として目指したい姿と現状を明確にし、目標に向かって具体的な業務をどのように行うか可視化した。また、このシートを業績評価とも関連付け、期首面談・期末面談で活用することで職員の意識向上やモチベーションの向上につなげるようにした。

学級担任は、このマネジメントシートの手法を学級活動の指導に生かすことで、児童の学期の目標設定と自己評価に役立てることもつながった。児童は、「育てたい3つの力」に沿って、なりたい自分の姿や具体的な取組を書き出し、日常の実践と振り返りにつなげられるようになりつつある。

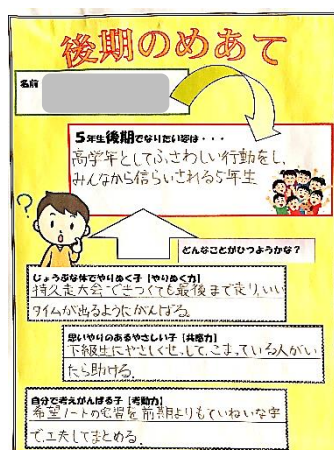


図3 児童のシート为例

② 学校教育目標の評価計画

「育てたい3つの力」をもとに、教育活動の実施状況を評価することで、学校教育目標の実現の達成状況を把握し、改善につなげることができるようにした。具体的には、次の評価を行うよう計画した。

【学校評価】

教育活動全般に渡り、保護者と児童を対象にアンケート形式で評価するようにした。「育てたい3つの力」の項目を盛り込んだ。

【教育活動評価】

学校経営案及び重点取組事項の「育てたい3つの力」をもとに評価する項目を盛り込んだ。

【授業評価】

校内研修を中心に、授業評価指標を設定するとともに、児童アンケート、各種学力調査を活用して、授業評価を行うようにした。

(2) 教育活動の実施（D）

学校教育目標の実現を目指し、校務分掌担当が中心となって教育活動を実施した。特に教頭、教務主任、研究主任等のミドルリーダーが中心となり、進捗管理を行い、全職員で教育活動の活性化を図った。

① 校内研修を中心とした授業改善

【学校教育目標とつなげるワークショップ】

他校の先進的な授業改善の取組を全職員で参観し、主体的な児童の学びのイメージ化を図った。その後、全職員でワークショップを行い、「育てたい3つの力」に沿って、具体的な授業における目指す児童の姿を考えた。具体的には、ア～ウの流れで行った。

ア 授業における児童の姿の洗い出し

イ 授業における児童に身に付けさせたい力（表1）の検討

ウ 「学習に関するアンケート（児童用）」（表2）の作成

表1 授業における児童に身に付けさせたい力

○課題を持つ ○見通しを持つ (助けを求め力)	○整理する力(分ける、比べる、関連付ける) ○協働する力(伝え合う、対話、協働)	○振り返る力
-------------------------------	---	--------

表2 「学習に関するアンケート」項目（一部抜粋）

1 授業に入る前に、前の授業で学習したことを振り返り、課題をもつことができる。
2 どのような問題を解いたらよいか、予想している。
3 学習のめあてを確かめたとき、まとめに何と書けばよいかわかる。
4 これまで学習したことを使って、課題の解決方法を考えたり、答えを予想したりしている。
5 例に示すような言葉を使って発表（発信）している。

児童に身に付けさせたい力は、「育てたい3つの力」を授業場面で身に付けるために明らかにした。これらの取組により、教職員だけでなく児童も含めた学校全体での共有化につなげることができた。

【主体的・対話的で深い学びの推進】

児童の主体的な学びの姿を目指し「問い」「協働」「振り返り」を授業改善の視点として取り組むことにした。各学年部の目指す児童の姿をもとに授業評価指標を作り、研究授業等において相互評価を行った。研究会では、授業改善の視点とともに、授業評価指標を活用して具体的な改善を協議していった。



図4 ワークショップ型の授業研究会の様子

【授業改善の取組】

授業研究会で出された改善案については、日常的な授業に生かすようにした。改善を積み重ね、すべての授業研究会が終わった12月から、各学級で改善授業を公開した。管理職だけでなく参観が可能な職員が授業評価を行い、授業後に担任と協議し、改善の効果を実感できる場を作った。

② 委員会活動の活性化

【自発的・自治的活動の活性化】

委員会活動は、前年度の課題をつなぐために活動を踏襲することが多かった。しかし、児童がより自発的・自治的に活動できるように見直すことで、「育てたい3つの力」を更に育成できると考えた。

そこで、本年度は、年度当初の計画を立てる段階から「育てたい3つの力」と様々な学校行事等を関連付け、委員会ごとにプロジェクト的な活動に取り組むことを確認した。そして、活動の様子を全校で可視化できるように掲示等の工夫を行った。

【保健委員会の取組事例】

保健委員会では、児童の現状を見つめることから始め、児童が話し合った結果、歯磨きの課題を改善するための取組を新たに取り入れることになった。そして「歯磨きパトロール」「歯の健康に関する読み聞かせ活動」を行ない、保健委員会が担当する児童集会「すこやか教室」につなげる取組まで発展した。

委員のモチベーションも高まり、昼休みに自分たちで集まり活動に取り組む姿も見られた。自発的・自治的な活動として、「育てたい3つの力」の「やりぬ

く力」につながる活動ができていた。年度当初の計画を作る段階から児童らで取り組むことができるように意識付け、環境を整えたことが効果的であった。

【地域とつながる取組事例】

委員会活動において、地域の教育資源を生かす校区をひまわりでいっぱいにするプロジェクト活動の取組を全校児童で行った。

計画委員会が中心となり、昨年度のひまわりの種の活用方法を考え、活動計画を立てた。その後、計画を全学級で検討したうえで、校区の様々な方にひまわりの種を届け、植えてもらう共通実践を行った。

校区にひまわりがたくさん咲き誇り、児童と学校が地域とのつながりを深めることができた。

③ 教科等横断的なカリキュラムの実効化

【教科等横断的なカリキュラムの作成】

昨年度は、教科等連携カリキュラムを新たに作成したため大きな労力が必要となった。そこで、本年度は道徳の別葉を参考に、玉名学（玉名市が取り組んでいる総合的な学習の時間を中心とした教科）や学校行事を中心に据え、「育てたい3つの力」ごとに教科等間、単元間を線で結び書き込むなどして教科等横断的な連携の可視化を図ることにした。

学年	道徳 (4年・5年・6年)	主な 学校行事	学級活動 (1)	学級活動 (2)	クラブ 委員会 委員会	国語 教科書	道徳 教科書
4年	1 朝がはる 2 朝がはる 3 朝がはる 4 朝がはる	入学式 入学式 入学式 入学式	朝がはる 朝がはる 朝がはる 朝がはる	朝がはる 朝がはる 朝がはる 朝がはる	朝がはる 朝がはる 朝がはる 朝がはる	朝がはる 朝がはる 朝がはる 朝がはる	朝がはる 朝がはる 朝がはる 朝がはる
5年	1 朝がはる 2 朝がはる 3 朝がはる 4 朝がはる	入学式 入学式 入学式 入学式	朝がはる 朝がはる 朝がはる 朝がはる	朝がはる 朝がはる 朝がはる 朝がはる	朝がはる 朝がはる 朝がはる 朝がはる	朝がはる 朝がはる 朝がはる 朝がはる	朝がはる 朝がはる 朝がはる 朝がはる
6年	1 朝がはる 2 朝がはる 3 朝がはる 4 朝がはる	入学式 入学式 入学式 入学式	朝がはる 朝がはる 朝がはる 朝がはる	朝がはる 朝がはる 朝がはる 朝がはる	朝がはる 朝がはる 朝がはる 朝がはる	朝がはる 朝がはる 朝がはる 朝がはる	朝がはる 朝がはる 朝がはる 朝がはる

図5 4年生の仮カリキュラム(※1月変更予定)

このことで、教科間の関連が深まり、学校内外の教育資源の活用も明確になり「育てたい3つの力」をより効果的に育むことが可能になると考えた。また、担任だけでなく、全職員の教科や教育資源を「つなぐ力」の向上も目指した。

【教科等横断的なカリキュラムの実践】

4年生の「共感力」を身に付けるための実践では、福祉をテーマに国語と玉名学の連携を図った。

国語の「だれもが関わり合えるように」の学習を深めた後、玉名学「生き生きとくらせる福祉のまち玉名」で、社会福祉協議会や地域の老人保健施設と連携

した体験学習を取り入れた。外部講師やお年寄りと直接触れ合うことで「共感力」を高め、学習を振り返り感謝の手紙を書くことができた。



図6 お年寄りと触れ合う児童

(3) 教育活動の評価（C）と改善（A）

定期的な教育活動評価や授業評価等の各教育活動の評価の積み重ねをもとに、学校教育目標の達成状況を評価し、改善策を考えた。年度内にできるものは改善し、それ以外は次年度につなげるようにした。

① 教育活動の評価

【教育活動評価及び経営アンケート】

前期終了段階での教育活動と学校経営に関する評価をアンケート形式で教職員に行った。教育活動の評価では、学習面、行事面、生活面における「育てたい3つの力」について数値化し、課題と改善点を確認し、後期に向けて方向性を共有することができた。

【授業評価】

研究授業を中心に、授業評価指標と事後研究会で成果と課題を出し合い、改善点を確認した後、改善の効果を検証するための授業を行った。

また、児童アンケートの結果（図7）から、授業で身に付けさせたい力が向上したと感じていることが分かった。

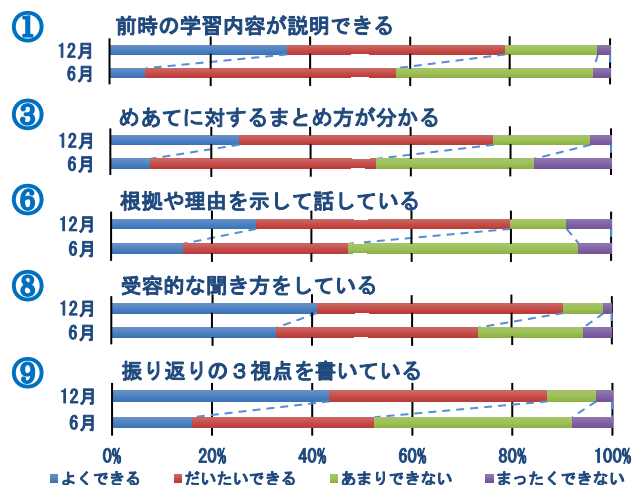


図7 児童アンケートの結果（12月末）

「教育活動評価及び経営アンケート」,「授業評価」

から、「育てたい3つの力」を評価し、改善のために修正する体制は整ってきた。このことから、全職員で学校教育目標の共有化を図った取組の効果が現れつつあると考えている。

② 教育活動の改善

大きな方向性の共有と組織やシステムの整備を行ったが、PDCAサイクルを回すためには、時間の確保とファシリテートが必要である。

【直後プランの改善】

各行事では、「直後プラン」に取り組んできたが、不完全であった。そこで、チーフを中心に、部会で十分に検討した後、担当者が校長にプレゼンし、その上で職員会議に提案するものと、「ゆうネット（情報共有グループウェア）」上で周知するものに分けた。その結果、職員会議時間の大幅短縮とともに、各計画案に工夫が多く見られるようになり協働性が高まった。

【学校教育目標の具体化に向けた実践事項の改善】

具体的実践事項は、有効な資料になっていると感じているが、職員が日常的に意識できなければ意味がないものである。そこで、SWOT分析でアイデアを出し合うのに加え、生徒指導の自己指導能力育成の3視点を反映させるためのワークショップを開き、職員が共有するとともに改善を行った。

3 まとめ

(1) 成果

学校経営のビジョンを分かりやすく示し、学校教育目標を共有化したことで、学校教育目標が全職員で評価し易くなり、PDCAサイクルの確立につながりつつある。このことが学校経営の好循環を生み出し、恒常的にカリキュラム・マネジメントを推進できる組織につながっていくことを管理職だけでなく、全職員で実感することが少しずつ増えてきた。

(2) 課題

今後、職員集団がより自主的に動くことができるように、横のつながりが更に強まる協働の機会を増やすとともに、学校内外の教育資源を教育課程上に可視化する工夫を更に進め、より効果的にカリキュラム・マネジメントを進めていく必要がある。

《引用・参考文献》

- 1) 文部科学省(2017)『小学校学習指導要領』
- 2) 文部科学省(2016)『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について（答申）』
- 3) 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会（2016）『次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ』